

一 般 演 題 抄 錄

## 17. ヒト悪性黒色腫病巣中に表現される CD95 リガンドの診断的有用性の検討

前田 晃 荒金兆典 手塚 正

近畿大学医学部皮膚科学教室

## 目 的

CD95 リガンドは標的細胞の CD95 を活性化することにより強力にアポトーシスを誘導する分子である。近年、メラノーマ細胞が CD95 リガンドを高度に表現し、メラノーマ病変部に浸潤して CD95 を細胞膜表面に表現する癌抗原特異的免疫担当細胞のアポトーシスに陥れることが報告された。今回の研究では、抗 CD95 リガンド抗体を用い免疫組織染色を行い、メラノーマ膜表面の CD95 リガンドがどの段階で表現され始めるのかを検討した。

## 対象および方法

46人の患者から得た49個の皮膚生検検体を用いた。これらは良性色素性母斑、異型母斑、表皮内限局型メラノーマ、ステージ I メラノーマ (クラークレベル2もしくは3)、進行期メラノーマ (クラークレベル4もしくは5)、そして皮膚原発メラノーマの所属リンパ節転移を含む。抗 CD95 リガンド抗体 (Santa Cruz) 及び抗 HMB45 抗体 (DAKO) を用いて間接蛍光抗体法による免疫組織染色を行い比較検討した。

## 結果及び考察

CD95 リガンドは検討した限り全例の進行期メラノーマおよびリンパ節転移例で陽性であったが、表皮内に限局したメラノーマ、良とメラノーマのサイズの相関を検討する目的で以上の実験結果を Breslow 厚を持って再分類したところ、CD95 リガンドの表現は腫瘍厚が0.75 mm を超えた検体でのみ陽性であることが判明した。我々は次に全検体を HMB45 で染色し CD95 リガンドの陽性所見と比べた。その結果、CD95 リガンドの陽性所見は進行期メラノーマにおいてのみ認められたのに対し、HMB45 のそれはメラノーマで認められたのみならず良性色素性母斑においても認められた。この結果は CD95 リガンド染色のほうがメラノーマを診断する上で有用度が高いことを示唆している。

## 結 論

今回の研究はメラノーマにおける CD95 リガンドの表現はメラノーマの悪性度と相関していることを示し、よって CD95 リガンド染色はメラノーマの診断上有用であることを示している。

## 18. 中耳腫瘍で発見された髄膜腫症例

斎藤 啓 村田清高 木村裕毅 伊東明彦 石川雅洋 細井裕司

近畿大学医学部耳鼻咽喉科学教室

髄膜腫は原発性脳腫瘍の約15%を占め、神経膠腫について多い良性腫瘍である。好発部位は頭蓋内だが、まれに、頭蓋外へ進展することもある。また聴神経鞘腫と類似する内耳道内髄膜腫もある。耳科医にとっても念頭に置いておくべき腫瘍である。今回、我々は頭蓋内髄膜腫が側頭骨内に進展し、最初に中耳腫瘍が疑われた2症例を経験したので報告する。

症例1は48歳女性、症例2は37歳の女性。患側は2症例とも左であり、難聴、耳閉感などを訴え近医耳鼻科で中耳炎として治療されていたが改善なく当科受診となった。また両症例とも頭痛のため他院での頭部単純CTscanを行っているが異常を指摘されていない。聴力は症例1は水平性、症例2は低音障害型の混合性難聴であった。耳鏡所見では鼓膜より透見できる赤色の腫瘍を認めた。他の脳神経症状はなく、鼻、咽喉頭、頸部に異常は認めなかった。側頭骨CT所見では側頭骨内STD、頸静脈孔の拡大を認めた。造影検査では左S状静脈洞は閉塞して

り、頭蓋内病変が示唆された。MRIでは小脳橋角部にT1でiso density, T2でhigh density, ガドリニウムで均一にエンハンスされる大きな腫瘤を認め、一部側頭骨内への浸潤を認めた。以上より頭蓋内髄膜腫の進展例と診断した。

耳鼻科領域における本邦での報告例は本症例を加えて10例、他に中耳原発のものが2例報告されていた。1例を除きすべて女性であり、年齢は中高年層であった。本症例は中耳腫瘍から発見されたが、他の脳神経症状が出現して発見された例もある。しかしこのような進展例は腫瘍も大きく、脳外科的にも完全摘出は困難なようである。しかし、頭部単純CTでは腫瘍はiso densityに描出され見逃される可能性もあり、造影CTおよびMRIが必要となる場合があるということ、また中耳腫瘍が疑われるとき頭蓋内からの腫瘍の進展も鑑別診断に必要なことも痛感した。